

2026 年度 鳴門市ドイツ館 板東俘虜収容所講座

板東俘虜収容所を知るための
5つの講座を開催します。

開催場所 鳴門市ドイツ館 1階大会議室
開催時間 第1・2回 午後1時30分～3時
第3回 午後1時30分～2時30分
第4・5回 午後1時30分～4時（特別講座含む）
参加方法 申し込み不要 参加費無料

第1回 9月19日（土） 午後1時30分～3時

講師 ドイツ館 主事 シュトライヒ・ダリオ

テーマ 鉄条網の中のクリスマス

イエス・キリストの誕生を祝う、東洋文化圏のお正月と同様に家族が集い、楽しく過ごす年中行事であるクリスマス。板東俘虜収容所で捕虜生活を送っていたドイツ兵にとっては家族等がいる故郷への思いがもつとも強くなった時期でもあります。大正時代の日本におけるクリスマスについて考察しながら、捕虜たちが手紙等で表している「鉄条網の中のクリスマス」を紹介します。



第2回 10月10日（土） 午後1時30分～3時

講師 徳島大学名誉教授 前ドイツ館 館長 川上 三郎

テーマ 板東の「収容所命令」と捕虜

板東俘虜収容所ではその時々、捕虜たちの生活や活動にかかわる命令を発令していました。「命令」そのものの存在は知られていたのですが、その全容がどのようなものであったか全く不明でした。昨年そのほぼ全てを含む資料が公開され、その詳細が判明しました。この命令文書は、ドイツ語でタイプライターによって複数枚作成され、兵舎ごとに配付されたものと思われます。今回はこの「収容所命令」を、いくつか具体例を示しながら解説します。

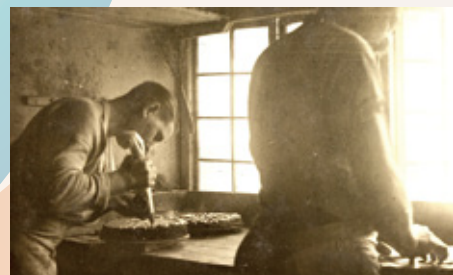
第3回 10月31日（土） 午後1時30分～2時30分

講師 ドイツ館 係長・学芸員 長谷川 純子

テーマ 板東俘虜収容所のパン・菓子工房「ゲーバ（GEBA）」
— 捕虜たちが焼いたパンと菓子 —

板東俘虜収容所には、ドイツ人捕虜によるパン・菓子工房「ゲーバ（GEBA）」がありました。本講座では、写真や広告、生産記録などの一次史料をもとに、日本に現存する最古級のシュトーレンの記録をはじめ、収容所内で作られた多様なパンや菓子を紹介し、捕虜たちの暮らしと食の営みをたどります。

あわせて、大正期の日本に広がりつつあったパンや洋菓子の文化、当時の食をめぐる状況にも触れながら、約110年前の板東で焼かれたパンや菓子が持つ歴史的な意味を探ります。



第4回 11月8日（日） 午後1時30分～2時15分

講師 ドイツ館 館長 森 清治

テーマ もうひとつの忠臣蔵 - 交響曲「忠臣蔵」はなぜ作曲され、捕虜の楽団に送られたのか -

赤穂事件を題材とした人形浄瑠璃や歌舞伎の演目である「仮名手本忠臣蔵」は、近代に入っても人気を博し、全国各地で頻繁に度々上演されている。板東俘虜収容所の捕虜を支援した、神戸在住のドイツ人商人でアマチュア音楽家のハンス・ラムゼーガーは、なぜ「仮名手本忠臣蔵」を題材とした交響曲を作曲し、捕虜の楽団にその楽譜を送り演奏させたのか。ラムゼーガーが交響曲「忠臣蔵」を作曲した動機と、日独戦争におけるドイツ人捕虜の動向から、この作品の持つ忠誠心の意義を推察します。

第5回 11月8日（日） 午後2時30分～4時

特別講座 講師 九州大学 准教授 今井 宏昌

テーマ 九州のドイツ兵俘虜収容所とデジタル副教材開発
— 第一次世界大戦をめぐる「グローバルな想起の文化」のために —

周知のとおり、第一次世界大戦期の日本で開設されたドイツ兵俘虜収容所については、これまで主に「日独友好」という文脈で語られる傾向にありました。しかし、開戦百周年を機に進展した歴史研究では、収容所の歴史を日独関係史の枠から解き放ち、個人・集団や地域社会のミクロな経験からマクロな世界史を捉え直す潮流、いわば「下からのグローバル・ヒストリー」の一環として再検討する方向性が打ち出されています。

グローバル（世界）とローカル（地域）の双方をつなぎ、収容所の記憶を喚起する「グローバルな想起の文化」の構築とその可能性について、一緒に考えてみましょう。（裏面参照）。

令和8年11月14日（土）
午後1時30分 開演
（午後1時 開場）

ドイツ兵合同慰霊碑建設 50 周年記念 ハンス・ラムゼーガー作曲
弦楽五重奏曲「忠臣蔵」再現コンサート 1階大会議室 入場料 無料

2026 年度 鳴門市ドイツ館 板東俘虜収容所 特別講座

講 師 九州大学大学院人文科学研究院准教授 准教授 今井 宏昌 氏

テーマ 九州のドイツ兵俘虜収容所とデジタル副教材開発

— 第一次世界大戦をめぐる「グローバルな想起の文化」のために —

周知のとおり、第一次世界大戦期の日本で開設されたドイツ兵俘虜収容所については、これまで主に「日独友好」という文脈で語られる傾向にありました。しかし、開戦百周年を機に進展した歴史研究では、収容所の歴史を日独関係史の枠から解き放ち、個人・集団や地域社会のミクロな経験からマクロな世界史を捉え直す潮流、いわば「下からのグローバル・ヒストリー」の一環として再検討する方向性が打ち出されています。またこれと同時に、デジタル人文学の進展に後押しされる形で、俘虜個人の資料の発掘、電子化、そしてウェブ公開も急速に進みつつあります。本講演ではこれらの状況を踏まえ、久留米、福岡、熊本、大分といった九州各地の収容所を対象とするデジタル副教材開発プロジェクトについて紹介します。グローバル(世界)とローカル(地域)の双方をつなぎ、収容所の記憶を喚起する「グローバルな想起の文化」の構築とその可能性について、一緒に考えてみましょう。

開催場所 **鳴門市ドイツ館
1 階 大会議室**
開催日時 **11 月 8 日 (日)
午後 2 時 30 分～ 4 時**
参加方法 **申し込み不要 参加費無料**



久留米俘虜収容所の捕虜リヒャルト・
シュラムのフォトアルバムより
参道の階段にて(1917年8月)
Auf einer Tempeltreppe, Aug. 17.



講師プロフィール
今井宏昌

1987年大分県日田市生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。
博士(学術)。

現在は九州大学大学院人文科学研究院准教授。専門はドイツ現代史。
単著に『暴力の経験史：第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験 1918～1923』
(法律文化社、2016年)、共著に『ドイツ国民の境界：近現代史の時空から』(水
野博子／川喜田敦子編、山川出版社、2023年)がある。